



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	演劇論および身体論的視座からの近代初期英国における服飾文化に関する研究
Author(s)	滝川, 睦; 内藤, 亮一; 八鳥, 吉明
Citation	服飾文化共同研究報告 2008 平成20年11月～平成21年3月 (2008-06) pp.33-37
Issue Date	2009-06-26
URL	http://hdl.handle.net/10457/873
Rights	

演劇論および身体論的視座からの近代初期英国における服飾文化に関する研究
The Research on Fashion and Clothing Culture in Early Modern England from the Viewpoint of
Theories of Drama and Somatic System

滝川 睦*¹⁺, 内藤 亮一*²⁺, 八鳥 吉明*³⁺
Mutsumu Takikawa*¹, Ryoichi Naito*² and Yoshiaki Hachitori*³

* 1 名古屋大学文学研究科 名古屋市千種区不老町
Graduate School of Letters, Nagoya University
Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

* 2 富山大学人間発達科学部
Faculty of Human Development, University of Toyama

* 3 群馬工業高等専門学校人文科学科
Humanities, Gunma National College of Technology

+ 服飾文化共同研究拠点 文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: This research was to examine historical fashion and clothing culture in early modern England by referring to the theories of drama and somatic system. The focal points of the research were as follows: the relationship between the clothing culture and self-fashioning in early modern English drama; the genealogy of gallant in early modern English culture; the cultural facets of the handkerchief in *Othello*. Firstly, the interrelationship between personae wearing uncomfortable dress and their unstable self-fashioning in Shakespearean plays was examined. Secondly, the cultural meanings of “gallant” in the contemporary English drama was demonstrated. Finally, the problem, regarding the representation as well as circulation of the handkerchief which engenders and encloses Desdemona in *Othello*, was investigated.

研究の目的

本研究の目的は、16-17 世紀英国における服飾文化の様態と、その文化を生成した近代初期英国社会のダイナミックスを、演劇論的視座および身体論的視座から歴史的に解明することである。

研究の方法

次の四種類の方法を用いて、上記の目的を達成すべく研究を遂行した。

- (1) 近代初期英国の服飾文化と関連性をもった言説を、16-17 世紀の公衆劇場用の演劇テキストや宮廷仮面劇のテキストから抽出・分析し、その結果をデータベース化する。
- (2) 16-17 世紀英国社会の安定化およびその流動性を表象する記号としての服飾の役割について

*1) mutsumut@lit.nagoya-u.ac.jp

て、当時の社会の様態を記した一次資料をもとに分析を行う。

(3) 近代初期英国における身体概念と服飾文化の関連性について、当時の医学、生理学、そして演劇のテキストを分析することによって、明らかにする。

(4) (1) - (3) を総合的に検討し、近代初期英国における服飾文化の実相を解明する。

研究の結果

方法欄に記したデータベース構築中に得られた、研究統括者と分担者による研究結果は次のとおりである。

(1) 「着心地の悪さ・居心地の悪さ—近代初期英国の服飾文化における—」(滝川)

近代初期英国において「ファッション」(fashion) という言葉は、服飾などのはやりの型を意味すると同時に、人の「姿や形」(*OED* “fashion” *sb.* 2. a)、「性質」(*sb.* 4)、「行動」(*sb.* 6. a, b)、そして詩人 Edmund Spenser が “Letter to Raleigh” において言明しているように、「人間を形成すること」をも意味した [1]。

この近代初期英国における服飾と自己形成との密接な関係は、清教徒 Phillip Stubbes の *Anatomy of the Abuses in England* (1583) の言説—服装は性差を明確にするために神が与えた記号であるがゆえに、異性装することは性を転換することであり、己の性を冒瀆することに他ならない—[2] によって裏付けられる。近代初期英国においては、服飾はすなわち身体、そして個のアイデンティティそのものなのである。

このような概念は近代初期英国社会において二つの動きとなって現れる。一つは為政者によって幾度となく発布された「衣服の奢侈禁止法」(sumptuary law) であり、もう一つは Stubbes が上掲書で弾劾する、英国の街で見られた、ファッションとしての異性装である。前者が、奢侈な服飾を取り締まることによって、身体やアイデンティティを社会・文化の規矩内に押さえ込もうとしたのに対して、後者は異性の服飾を身に纏うことによって、ジェンダーと社会の規範から逸脱しようとするものである。

服飾をめぐるこの二つの動きが表象される場が近代初期英国演劇である。近代初期の英国社会の階級秩序や性を厳格に表わす服飾がロンドンの公衆劇場で再利用され、そうした階級秩序の周縁に位置する男性役者の身体を包む。そもそも舞台上身につけられる服飾は、その服飾を纏った人物のアイデンティティを同定するための「小道具」なのであるが、近代初期英国の演劇世界においては、そうした「小道具」そのものにアイデンティティを不安定にさせる要素が含まれているといえよう。さらに、その不安定さを加速化するように、そしてロンドンのファッションを模倣するかのようにして、Shakespeare、John Lyly、Thomas Dekker など当時の劇作家たちは競って、男装する女性登場人物たちを創造した。

ただし Shakespeare の劇作品においては、新たな衣装や男装に身を包むときの高揚感よりは、むしろそうした服飾を身につけているときに感じられる「着心地の悪さ」が強調されている。たとえば、*Macbeth* (1605?) において、国王殺害を断行する Macbeth が、「病にかかった国を / 支配というベルトで締めつけておけない」状態であるとか「小人の盗人が巨人の着物を盗んだように / 王位が身につかない」有様であると語られたり (5. 2. 15-16, 21-22) [3]、*As You Like It* (1600?) においては Rosalind が「男装しているからといっても、気質までも男装しているわけではない」

(3. 3. 162-63) [4] と吐露したりする場面にそれは端的に表現されている。着心地の悪さが、居

心地の悪さ、つまり存在やアイデンティティの不安定感と結びついているのである。

このような Shakespeare 劇の特徴は、劇作家が (a) 衣服の奢侈禁止法に代表される為政者の動向に敏感であったこと、(b) 異性装に象徴される「晴れ」—祝祭の時空—に劣らず、プロットの終結を導く「褻」(け) —日常世界—を重視したこと、(c) それに身を包む者のアイデンティティに揺るぎをもたらすような、記号としての服飾に内在する脱構築的要素に意識的であったこと、などに由来すると考えられる。

(2) 「gallant の服飾文化学」(内藤)

資料収集と先行研究の調査から得られた今年度の成果として、現在考えていることは、本研究課題である、演劇論、身体論の視座から社会の安定化・流動化と服飾文化が結節する一つの例として、Thomas Dekker の *The Gull's Horn-Book* (1609) [5] などに描かれている gallant と呼ばれる華美な服装をする人物像の実像を研究テーマの一つとすることである。問題点はこの gallant という人物像は、当時の文献に頻出するものであるが、華美な服装をした人物として批判的に描かれている場合もあれば、たとえば Shakespeare などでは、騎士の勇敢さを指す場合と両方があることである。この gallant に対する評価の分かれ道を服飾文化との関連で、仔細に見直すことで、これまで見落とされていたことがわかるかもしれない。OEDによれば、gallantはこの時代の意味としては、名詞で a man of fashion and pleasure, a fine gentleman、形容詞として、gorgeous or showy in appearance、また chivalrously brave, full of noble daring などの意味があるが、後者「騎士のように勇敢な」の意味は Shakespeare が初出である。名詞でもこの「騎士のように勇敢な」という形容詞の意味合いが付加されることもある、と OEDにはある。また Alan C. Dessen 等による初期英国演劇の『ト書き辞典』によれば、gallant は costly, fashionable, extravagant clothing, often linked to a rise in status とあり、華美な服装がとくに地位の向上を表すことが示唆されている [6]。また同辞典によれば brave も widely used for costly, fashionable, extravagant clothing と、ト書きにおいては、gallant とほぼ同じ意味であることが示されており、初期英国演劇において gallant と brave は服装に関して共通した意味を持っていたことがわかる。また先の OEDの意味にもあるように gallant と brave は華美な服装と騎士を結びつけるキーワードである。華美な服装を批判したのは、Dekker の前に Phillip Stubbes がいるが、一方、貴族は軍事的には時代遅れの騎士の華やかな服装で肖像画を描かせた時代である。また、この時代の「服装をみせびらかす」ことを主題に、劇場論・身体論を絡めた研究書としては Amanda Bailey の *Flaunting* (2007) があり [7]、またイギリス人の豪華な舶来品愛好をナショナル・アイデンティティのあり方と絡めて論じたものなど [8]、華美な服装をする とくに男性の研究が今後の研究展望としては重点的課題となる。これらを総合して、gallant をひとつのキーワードとして、関係演劇作品、文献等を精査し、そこに表れる服飾関係のデータベース作成をさらに進める予定にしている。

(3) 「服飾と身体の交錯——Othelloにおけるハンカチ再考——」(八鳥)

今年度は Shakespeare の劇 *Othello* (1604?) の読解を通して、初期近代英国における服飾と身体の問題を考察する。*Othello* では Othello が妻の Desdemona に対して抱く嫉妬が悲劇をもたらすが、そこではハンカチとそれに付随して実体化される女性的身体が悲劇の重要な要因を構成し

ている。

ハンカチは16世紀から17世紀にかけて、つまり初期近代の「文明化の過程」[9]の中で、主として女性によって使用されることが一般化していくが、ハンカチは使用価値のみならず、結婚の贈物や階級的の差違を明示する奢侈品としての文化的価値も内包していた[10]。しかしハンカチの使用価値それ自体も身体、特に女性の身体と連関して、重要な文化的意味を発現させた。ハンカチは汚物や体液を除去・吸収することで身体を清潔“pure”な状態に保つ役割を果たしたが、清潔であることは同時に純潔“pure”であることを女性に課した。ここには清潔さという概念を軸にした女性の身体観の再定義が絡んでいた。身体の清潔さを確立することは、特に身体の開口部（目・鼻・口・耳・性器・肛門など）を焦点化することに繋がり、身体は「囲われた身体」として再定義され、規範的な女性は「囲われた庭」として形象化された[11]。しかも同時に女性の身体は常に男性の身体が劣化したものと考えられた。その結果、初期近代の支配的言説において、女性の身体を「漏れやすい器」“leaky vessel”とみなす身体観がイデオロギー的に形成され、ハンカチはその家父長制的イデオロギーの生成を促す一翼を担った。ハンカチは「漏れない器」を保証し、純潔・貞節という概念と結び付き、それを実体化したのである。したがって Othello から贈られたハンカチをなくす Desdemona は象徴的にも現実的にも貞節を欠いた女性として Othello に推断される。Desdemona の不貞を疑う Othello が彼女の手を “This hand is moist” (3. 4. 36) と描写するとき [12]、Othello は Desdemona の身体を「漏れやすい器」へと還元し、Othello の思考の中で Desdemona は淫らな女性へと変貌を遂げていく [13]。

Othello の中でハンカチはさらに目や鼻、耳、唇と結び付く。Othello は Desdemona に “Make it a darling, like your precious eye!” (3. 4. 68) と指示し、また後には嫉妬で混乱しながら “Noses, ears, and lips. Is’ t possible? Confess! handkerchief!” (4. 1. 42-43) と叫ぶ。これらの連想は偶然ではない。目、鼻、耳、唇といった身体開口部はハンカチと換喩的關係にあり、隠喩的には目は女性性器の象徴となり、同時に男性の窃視症的視線を含意し、また鼻は男根、耳や唇は噂や内通を暗示する [14]。この連想には Othello の男性としての不安が露呈している。錯乱していく Othello の思考から繰り出されるこれらの言葉は、Othello の意識の中で姦婦と化していく Desdemona の身体と対応しつつ、女性的身体を規定していく。

このように *Othello* においてハンカチは女性的身体をイデオロギー的に規定し、家父長制的イデオロギーに基づくかたちでジェンダーやセクシュアリティを実体化する機能を具現しているが、同時にハンカチは敬虔や堅忍といった宗教的・精神的崇高さを暗示する効果を持ち [15]、さらに Desdemona や Emilia といった女性搭乗人物が自らのアイデンティティや主体性を築こうと行為する際の物質的基盤にもなっている。男性登場人物が専有し、支配するハンカチとその解釈を拒否し、それらを取り戻そうとする行為を通して彼女たちが求めているのは、女性性や女性の身体がイデオロギー的に規定され、囲い込まれるのを回避し、それらに他の可能性を見出そうとすることである [16]。服飾が行為体 (agency) にとって重要な手段となり得る可能性を *Othello* は胚胎している。

以上のような問題意識から、今後さらに初期近代英国演劇における服飾と身体の問題を考察していく。

文獻

1. Edmund Spenser: "Letter to Raleigh," *The Faerie Queene*, edited by A. C. Hamilton, p. 714, Longman (2001)
2. Phillip Stubbes: *Anatomy of the Abuses in England*, edited by Frederick Furnivall, p. 73, Kraus Reprint (1965)
3. William Shakespeare: *Macbeth*, edited by A. R. Braunmuller, p. 221, Cambridge UP (1997)
4. William Shakespeare: *As You Like It*, edited by Michael Hattaway, p. 137, Cambridge UP (2000)
5. Thomas Dekker: *The Wonderful Year; The Gull's Horn-Book; Penny-Wise, Pound-Foolish; English Villainies Discovered by Lantern and Candlelight; and Selected Writings* (The Stratford-upon-Avon Library 4), edited by E.D. Pendry, Edward Arnold (1967)
6. Alan C. Dessen and Leslie Thomson: *A Dictionary of Stage Directions in English Drama, 1580-1642*, Cambridge UP (1991)
7. Amanda Bailey: *Flaunting*, U of Toronto P (2007)
8. Roze Hentschell: "A Question of Nation: Foreign Clothes on the English Subject," *Clothing Culture, 1350-1650*, edited by Catherine Richardson, pp. 49-62, Ashgate (2004)
9. Norbert Elias: *The Civilizing Process: Sociogenetic and Psychogenetic Investigations*, translated by Edmund Jephcott, edited by Eric Dunning, Johan Goudsblom, and Stephen Mennell, Rev. ed, Blackwell (2000)
10. Stephanie S. Dickey: "'Met een wenende ziel ... doch droge ogen': Women Holding Handkerchiefs In Seventeenth-Century Dutch Portraits," *Beeld en zelfbeeld in de Nederlandse kunst, 1550-1750 / Image and Self-Image in Netherlandish Art, 1550-1750*, edited by Reindert Falkenburg, et al, Nederlands Kunsthistorisch Jaarboek. Nr. 46, pp.334-36, Waanders Uitgevers (1995)
11. Peter Stallybrass: "Patriarchal Territories: The Body Enclosed," *Rewriting the Renaissance: The Discourses of Sexual Difference in Early Modern Europe*, edited by Margaret W. Ferguson, Maureen Quilligan, and Nancy J. Vickers, pp.125-29, U of Chicago P (1986)
12. William Shakespeare: *Othello*, edited by E. A. J. Honigmann, The Arden Shakespeare, 3rd. ed., Thomas Nelson (1995).
13. Will Fisher: *Materializing Gender in Early Modern English Literature and Culture*, Cambridge Studies in Renaissance Literature and Culture 52, pp. 50-56, Cambridge UP (2006)
14. (1) Douglas Bruster: *Drama and the Market in the Age of Shakespeare*, Cambridge Studies in Renaissance Literature and Culture 1, p. 82, Cambridge UP (1992)
(2) Peter Stallybrass: pp. 138-39
15. Stephanie S. Dickey: p. 355
16. (1) Susan Frye: "Staging Women's Relations to Textiles in Shakespeare's *Othello* and *Cymbeline*," *Early Modern Visual Culture: Representation, Race, and Empire in Renaissance England*, edited by Peter Erickson and Clark Hulse, p. 220, U of Pennsylvania P (2000)
(2) Natasha Korda: *Shakespeare's Domestic Economies: Gender and Property in Early Modern England*, pp.156-57, U of Pennsylvania P (2002)
(3) Peter Stallybrass: pp.141-42